ある冬の日のこと.....

マホ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある冬の日の……

【コード】

N1691Q

【作者名】

マホ

【あらすじ】

ある夏の日……の続きになっておりますが、これだけでも読めます。

海音ちゃんと鳴戸くんのドタバタコメディになっています。

相変わらずの中二病に「注意」ください。

澄み渡った冬ぞらに雲はなく……どこまでも爽やかな青が空に満ちている。

顔の周りを踊る髪は冷たい風に煽られてきつと私の頬は淡い赤に染まっている事だろう。

そう、こんなにも素敵に冬晴れの日は何故か私は全力疾走していた。今の私は制服にコートそれからマフラーと、厚着なわけで走るのが暑くてたまらない。

「鳴戸ーっ！」

そもそも、何で私が鳴戸なりとの名前呼びながら校内走りまわらないといけないわけ？

「あれー？ 海音ーまた鳴戸君探してんの？ おっー」

くっ……。

この光景が毎回恒例になりつつある事が悲しいよ。

いや、夏休み明けから今まで毎日か……。

「海音ちゃんファイター」「海音ちゃんたまには俺を追い掛けてよ」「毎日お疲れ様ー」

シクシク……

ギャラリーが応援してくれるのは嬉しいような悲しいような複雑です。

途中変なの混ざってるけどそこは割愛。

「応援どうもーっ!」

一様手を振って答えておく。

「あぁっ今日も我らが海音ちゃんはプリティだぁ」

「あの笑顔何万ボルトだっ!?!」

「エラブユーっ」

……………っん。

割愛って事で。

「俺の海音に話しかけるなー!」

あ、鳴戸が飛んできた。

(いや、実際に浮いてはいないよ？ 一様学校だし)

「ったく……あのね私は鳴戸のじゃないし、そんなに早く戻って来れるなら私を走らせるな」

ほんとに毎日何のために走ってるんだか……

「ごめんね海音……海音と追いかけてこするのが毎日の楽しみなんだ」

楽しみなんだって……

いや、そんな上目遣いにうるうる見つめられても困るからっ！
ほんとに顔が物凄くタイプなんだよな私。

う、ううう……

「わ、わかったわよ……でも私は鳴戸のものになった覚えはないからねっ」

「でもさ、俺らってさ海音ー同じベッドで寝」「キヤアアアッ！
な、なななっ何を言ってくれてんのよおおっ！」「」

自分の顔が寒さだけではなく赤くなるのがわかる。

「う、海音ちゃん……」

「ベッドってベッドって……」

やっぱり誤解されてるじゃんっ！

「ち、違うよっ？ そんな貴方たちが想像してるような事は断じて無い」海音って寝るとき左向きだよー」鳴戸ーっ！」

意図的に聞かせてるよね！？

「そ、そうなんだ」

「海音ちゃん……今夜はうちに（……ドゴッ）

グフっ」

「行くぞ海音」

「ちよっ！ ごめんねっ」

さんざん余計なアピールをした鳴戸は、一人を殴り……私の手を掴むとどンドン歩いていってしまう。

「鳴戸！ 何で怒ってるの？」

「海音は無防備すぎるの！ 何でアイツらに笑顔を向けるの？」

前を歩く鳴戸の顔は見えないけど、きつととても怒った顔をしているんだと思う。

「笑顔って……応援されたのに無視なんてできるわけ無いでしょ？」

「海音のお人好し……まあそんな海音だから俺も気に入ったんだだけ
ぐわ」

なんかさらっと恥ずかしい事言わなかった？

「な、鳴戸……明日から冬休みなのは知ってる？」

「（話しそらしたな……）あー何か言ってたな長みたいな奴が」

長おのつて……校長先生の事だよな？

「冬休みって何だ？」

やっぱり……ね。

「前に、私が鳴戸と出会った時は夏休みっていうの。長いお休みの事ね？ 今回は冬にある長いお休みなよ」

しばらく黙り込んでいた鳴戸は、突然表情を明るくすると、

「わかった！ 楽しみだな！」

んん？

どうわかったのか気になる所だけど……

「そうだね……で、明日から私達一家はまたお出掛けするんだけど行く！！」……はい。やっぱりね」

さて、私の手を引くこの超イケメン男……今年の夏に私が拾った（私にとりついたとも言っのかな？）妖……江戸時代に封印され、今まで眠っていた所を私が起こしてしまったわけで……

何やら気に入られ……我が家に居候しているという今現在。

「ついたぞ、んじゃよろしくー!」

手を話した鳴戸は、小刀に戻ると私の手の中におさまった。

鳴戸が、うちに居候している事は家族は知らない。

鳴戸は小刀に化けて毎回うちに潜入(?)しているからね。

ちなみに封印されていたのもこの小刀。

「ただいまー」

「あら? おかえりなさい海音、明日からの準備をしておくのよ」

「はーい!」

十

「なーなー海音? 明日から何処に行くんだ?」

ベッドに座る鳴戸は、鞆に荷物をつめる私を見ながら今さらな疑問を聞いてきた。

「山よ」

夏に、里帰りした山とは違う……いわゆる別荘というやつね。

どこからその財力が出てくるのか不思議でならないけど……

「この寒いのにわざわざ何しに？」

「ウィンタースポーツって言って、遊びに行くの」

「ういんたー？」

……ひいおじいちゃんと話してるみたいだわ。

「行けばわかるわよ」

「ふうん……楽しみだな！」

ニクニコ、ルンルンを撒き散らして笑ってるね。

さて、こうして私達の冬休みは始まった。

十

「ヤッホー！ 海音ーあんたもやってみなさいよー楽しいわよー？」

白銀に染まる山に降り立った私達は、そのまぶしい程の景色を堪能

していた訳だが、そんな中うちのオチャメな母は山びこを始めた。
私はしませんよ？

「先に行くね」

「はい！ やあまあああ！」

はあ……

お茶目な母はほつといて、山荘に荷物を置きに行く。

ついでに鳴戸を出してあげようかな。

「さっぶ！ 海音、寒いよう」

「あー……服、出してあげるよ。 ちょっと待ってて」

冬用山荘という事で、防寒グッズは豊富にあるはず。

「はい。 まだ寒い？」

「うーん、大丈夫！」

モコモコになった鳴戸を連れて、早速ゲレンデへ！

「ゆっきだあ！ うわあ……何年ぶり!？」

「三百年ぶりくらいじゃない？」

「久しぶりのはずだな」

寒い、寒いと小さくなっていくせにゲレンデについた瞬間……子犬のように？ 走り回っている。

「私は、スキーだけど……鳴戸は、板一枚と二枚どっちが好き？」

スノーボードと、スキー板を見比べた鳴戸は、突然顔をあげると、

「俺は……海音にす「スノーボードにしないで。そのがいいわ」……聞いてよう」

鳴戸のアホな発言はスルーで。

スノーボードの人って憧れるよね。

「いい？ ここに足はめて、片方で蹴ってバランス取りながら降りてくのー！」

「うわっ！？ これ早いな！ おもしろおお……」

叫ぶ声が小さくなって、下に降りていった。

ってか、滑ってるよね？

私半分突き落としたのに。

ってか、見えなくなる前に追いかけないと！

「な、鳴戸ーっ!？」

加速しながら降りていったら、回り角の所で待っていてくれた。

……止まり方も曲がり方も教えてなかったのに。

「ういんたーすぽーっって楽しいね!」

「うん、すごい運動神経だねえ」

「昔、中国の猿に乗せてもらった雲ににたからね」

中国の猿って……一人しか思い付かないよ？

雲って、金斗雲ってやつ？

うーわー……。

「そ、そうなんだ……下まで行くつか？」

「うん!」

しばらく、滑って楽しんだ鳴戸は、何をどうやったらできるのか八
イレベルのテクニクを身に付け……ジャンプはもちろんターンも
完璧。

ほんつと人外だよね……妖か。

そろそろ暗くなってきたか。

「鳴戸ー！ そろそろ戻るわよ？」

「わかったー！ 最後に大技見てっ江戸一番の妖術つかい鳴戸様の十八番……白銀浮遊！」

叫びながら、加速した鳴戸は夏に一度だけみたあのオーラのような光を纏うと真っ白な雪を巻き散らしながら輝く鳴戸は暗くなり始めた辺りに怪しく煌めき……息を飲むほど綺麗だった。

高くジャンプした鳴戸は長すぎる滞空時間の合間に両腕をあげると、粉雪が渦巻きながら舞い上がり白い着物をまとったよう。

小さな雪の一粒一粒が光っている。

一瞬鳴戸の姿が完全に雪に隠されると、次の瞬間には白と銀、金をあしらった着物に姿が変わっていた。

「海音ー！ どうっ？」

「ん……カッコいいと思うっ、よ？」

「え……（素直に誉めてくれるとは思わなかった）あ、ありがとう
ってうわぁ！」

……あ、落ちた。

「って、鳴戸!？」

ズザザザッ!

山だもんねえ……
転がり落ちたわ。

怪我はしてないだろうな……鳴戸だし。

板外して広いに行かないとねえ。
めんどいわ。

わわ!

これ……なかなか危険かもしれない。

あ……

今物凄く悪寒がした。

嫌な予感がする。

だって雪山に浴衣の女の人なんているわけない。

うん、ほら暗くなってきたし？

通り過ぎよう。

見えない、私には見えない、何にも見えない

「ちよいと、お嬢ちゃん？」

は、話しかけられたよおおお

「見えない聞こえないわ通じないわよ？ お嬢ちゃんから上質の靈気を感じるのよ……ね、ちよいと私の相手してくれないかい？」

妖美に微笑む女の人から逃げることはできなさそうだ。

「……………なんでしょう」

よく見るとその女の方は、真っ白なシルクのような肌に薄く色付いた唇、艶やかな長い黒髪、長いまつ毛に縁取られた大きな瞳。

鳴戸と並んでも見劣りしないような美人さん。

「可愛らしいお嬢ちゃんね……そうだ！ お嬢ちゃんの連れの所まで案内してあげるわ」

な、流れがつかめん。
でも案内してくれるのはありがたいわね。

「……お願いします」

「退屈してたのよねー楽しくなりそうだわ」

女の人に導かれ向かう先には、

「　　んだと？ あいつは死んだんだ、なのにあいつの名前を
語ってしかも同じ着物だと？ 俺のダチを愚弄するな！」

鳴戸の声じゃない……？
他にも誰かいるって事？

「だあかあらあ……俺が鳴戸だって言ってるじゃん！」

林を抜けると、鳴戸と向かい合った男の人……うわ負けず劣らず美人さん。

でも、尻尾と耳があるね……オオカミ？

「うるせえ！ あいつは「あなたがうるさいわよ。 鳴戸君、お久
しぶりね貴方の連れ案内してあげたわよ〜」雪蘭！ こいつが鳴
戸って」

「あんたはめんどくさいのよ。 はい、お嬢ちゃん到着よ？」

冷たくあしらった雪蘭さんは、私に笑顔を向けると、鳴戸を指差した。

「海音ー！ 迎えに来てくれたのっ？」

抱きついてくる鳴戸を抑えつつ、

「雪蘭さん？ ありがとうございます」

お礼はちゃんといわないと、ね？

「俺を無視するな！」

ギャンギャン吠えてるやつは無視で。

「銀狼……俺今この子のところでお世話になってるんだ」

鳴戸に抱きすくめられつつ紹介された。

「この子って……人間だろ？ しかもこの靈気、陰陽師の家系だろ
!?!?」

陰陽師？

うちは、寺とか占いとかなんてしてないよ？
昔から変なものはみえたけど……。

「だろうね、封印とけたって事は」

「だろうねって何でお前を閉じ込めた敵と……お前鳴戸に何かした

のか……？」

敵意むき出し。

『俺の仲間に何かしたなら最上級の恐怖を味あわせてやるよ』
と、目が言っているわね。

吠える犬は嫌いな。

「……初対面の人にお前なんて呼ばれる筋合いはないわ。 雪蘭さん、暗くなりましたので私達は失礼します。 ありがとうございます。 しました」

小さく雪蘭さんに会釈すると、

「またな！」

鳴戸も笑顔で手をふった。

「ええ、また来てね？」

雪蘭さんは美しく微笑むと手を振ってくれた。
いい人だったなー！。

まだ吠えてる銀狼を無視して背を向けると、

「てめえ……人間のくせにいい度胸じゃねえか。
普通、俺ら二人を見た人間は皆逃げるか気絶するかしてたのに。
ふむ、いいだろ鳴戸に免じて喰わずにおいてやるよ」

「てめえって言わないでくださいません？　うちの妖で慣れましたから基本的に平気です。そして、喰われる予定はなかったのです。んな恩着せがましく言わせてもありませんがたくないです。」

私の言葉に八重歯を覗かせ二ツと笑った銀狼は、

「変わってるな海音、その生意気な態度気に入った！　俺もお前の家でお世話になるぜ！」

「じゃあ私もー！」

は？

ちよつと待った！

あんの犬何いつてんの？

つてか、雪蘭さんまで……！？

「えっ！　ちよ待って？」

彼らの立っていた場所には、銀の鈴と真つ青な石の通された首飾りが雪の上でほのかに輝きながら落ちていた。

「賑やかになるね」

鳴戸はものすごく嬉しそうだね。

「私了解してないよ……」

こうして、我が家には三人の妖が同居する事になったのです。

休みの度に増えてたらきりがないよね。

ちなみにこの二人も新学期からうちのクラスにやってきた。

雪蘭さんは、制服姿の時は弱冠若返っていたような。

彼ら妖達は……鳴戸は江戸一番の妖術使い、銀狼が二番同率で雪蘭らしい。

さて、こうして私たちの冬休みは終わって行きました。

これからの事を考えると……ああ憂鬱。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1691q/>

ある冬の日の.....

2011年1月19日02時01分発行